

## 『漢書』解説

前川 捷三

<資料> 書名は「かんじょ」と読む。巻一から六までの六巻を存する。二冊。第一冊は表紙左に『漢書 帝紀一上下』、右に「高祖」と墨書。第二冊は表紙左に『漢書 帝紀二之六』、右に「惠帝 高后 文帝 景帝 武帝」と墨書（二行。第二行の武帝の文字は虫損のため見難くなっている）。第一冊の高帝紀第一上は三十八丁、第一下は二十八丁。第二冊の惠帝紀第二は六丁、高后紀第三は八丁、文帝紀第四は二十四丁、景帝紀第五は十二丁、武帝紀第六は四十一丁。両冊ともに柱刻には『前漢紀』としている。班固撰、顔師古注。正文は大字、一行十七字。注文は割注、双行、小字、一行十七字。綾装、袋綴じ。古活字本。本の大きさは縦約29糎、横約20.5糎。

<著者> 班固とその父班彪の伝記は『後漢書』列伝第三十に見える。班彪は心を史籍の間に専らにして、武帝の時に司馬遷が著した『史記』を継ぎ、後伝数十篇を作った。子の班固は父の業を承け、潜精積思すること二十余年、建初（西暦76 - 83年）中に十二紀、八表、十志、七十列伝から成る『漢書』を撰した。顔師古の伝記は『新唐書』巻一百九十八に見える。太子承乾の為に『漢書』に注釈を作り、時人は彼のことを「班孟乾（班固の字）の忠臣」と呼んだ、という。

<解説> 菅文庫本は『漢書』の帝紀、それも高祖より武帝に至る六代の帝紀のみ存する。

第一冊では一例として巻一上の一丁ウラを見る。正文、注文中に朱引きがある。皇甫謐・高祖などの人名には漢字中央に、左傳・漢書などの書名には漢字左に、漢・秦などの国名や地名には漢字右に朱線を引く。なお注文の最終行「説文」は左に朱線を引き、それを白く塗って消している。「李（李斐）説、文（文穎）音是なり」とすべきを「説文（説文解字）」と誤ったのを訂正したものである。

正文、注文ともに朱で句点を打つ。また、部分的に返り点と送り仮名を付している。これには朱書も墨書も用いられる。

上欄には皇甫謐、左傳、戦國策と文中に見える人名、書名を墨書する。また、彊宋、太宋、額宋と宋刊本との対校を朱書する。

上欄の対校について言えば、多くは朱書であるが、巻一上の十三丁ウの「子宋」のように墨書もある。

対校は毛本とも行われている。極めて薄い藍色で記され、非常に見難い。巻一上には、

- ・六丁オ 毛本因作困（正文因字の左に藍で点を打つ）
- ・十二丁ウ 毛本末作未

の二例がある。毛本は明末、毛晋の汲古閣本を表す。

薄い藍色で「巨」一字を記すのは、巻一上の二十一丁オ。巨を朱書した後に白く塗り消し、その左に記している。

第二冊でも毛本との対校は同様に記される。

以下、巻ごとに示す。

巻二

- ・三丁ウ 毛本都作郡（正文都字の左に藍で点を打つ）
- ・四丁ウ 毛本捶作揺
- ・五丁ウ 毛本繫作繁

巻三

- ・一丁オ 毛本成作城

巻四

- ・一丁ウ 毛本親作觀
- ・六丁ウ 毛本轉作輔
- ・七丁オ 毛本丞作承
- ・十三丁オ 毛本并作羊
- ・十三丁ウ 毛本如作始
- ・十四丁ウ 毛本閤作閣
- ・十六丁ウ 毛本瘡作塵注同（正文と注文の瘡字の左に藍色で点を打つ。瘡、塵は瘡、塵）
- ・十九丁オ 毛本數作散（數は數、散は散）
- ・二十丁ウ 毛本危作免
- ・二十丁ウ 毛本之作以
- ・二十一丁オ 毛本柳作柳（柳は柳）
- ・二十一丁オ 毛本注兩庚字作庾（庾は庾）
- ・二十四丁オ 毛本録作銀

（なお、九丁オには「以毛本作已史記同」を墨書している。）

巻五

- ・三丁ウ 毛本筋作筋
- ・四丁ウ 毛本梁作渠
- ・四丁ウ 毛本臨作嗣
- ・五丁オ 毛本脇作脅
- ・八丁オ 毛本明作朋
- ・八丁ウ 毛本行作律
- ・十二丁オ 毛本岡作岡（岡は岡）

毛本との対校は以上のようなものである。本書は、この他にも調査・検討を要する貴重な資料である。

（本学教育学部教授）